

「ユールの調香師」について

森岡志保

「香りはただ『香り』であるだけでなく、生き物の音であり、色であり、そして、自然すべてに宿る聖霊そのものだ」

これは短編内でのアードの独白です。人智を超えた存在への信仰に関わらず、植物の生み出す香りは、尊く、美しい。

この物語を書いたあと、ミーリヤに捧げる香りを実際に作りました。

私自身がアードになって、まるであのアトリエにいるような気持ちで。

物語に出てくる乳香（にゆうこう）と没薬（もつやく）は、樹脂から採れる香油です。

乳香は英語でフランキンセンス、没薬はミルラ。

イエス・キリストの誕生時に、賢者達がベツレヘムの星が輝くのを見て駆けつけたときに持ち寄った贈り物が乳香、没薬、黄金の三つ。これはキリスト教徒でなくともアロマをたしなむ人ならよく知っている伝説なのですが、確かにどちらの香りも、清涼さと力強さを併せ持ち、心の奥深くに届くような、神聖な雰囲気醸し出しています。

乳香、没薬、白い花に柑橘、セージ……。様々な精油を混ぜ合わせて作られた、ミーリヤに捧げる香り。今この文章を書いている今も、私の手首からほのかに漂い、深い安らぎをもたらしています。私自身は信仰を持ちませんが、確かにアードの言葉通り、香りはただ香りであるだけではない、と感じます。

アードがその信仰心から聖霊の気配を感じるシーンが生まれたことは、現実主義の私にとっては新鮮な出来事でした。

架空の街であるユールを舞台に、淡々と綴られるクリスマスの記録。この空想の物語の中を自分自身が旅しながら、言葉も、香りも、自然と生まれていきました。

ミーリヤに捧げる香りは、物語の終わりに櫛の木に垂らされます。聖堂はきつと人で一杯なのでしょう。でも、とても静か。

もしもこの香りがお手元に届くことがありましたら、聖堂で一緒にアードを見守っていることを想像しながら、ほのかに香らせて、星明かりや蠟燭の火のもと、静かな夜をお過ごしください。